

人生古希で振り返る

杉山 孝治

(昭和35年建築科卒)



私は日本海側に突き出た男鹿半島中央部の寒村集落北浦地区安全寺の地で、父親53歳・母親41歳の5男末子として、1941年8月22日に誕生する。(高校入学手続きの時、父親の2回目の妻の子供であることを初めて知る)長兄(先妻の子)は戦死、次兄は家督相続で今も百姓をしている。幼少時は近所の子供たちと長兄の古軍帽、古軍服上着を着て、兵隊ごっこ遊びがおもだった。終戦2年目で山火事の飛び火から、自宅と安全寺小学校校舎が焼失した。翌年には運動場に丸太小屋の雨漏りのする仮設校舎で小学1年生の入学式が行われ、1年間授業を受けたが、悪戯鬼グループの先頭になり、悪ふざけ遊びをしてほとんど女性先生の授業を聞かず、落ち着きがなくて今でいう学級崩壊の筆頭役の落ちこぼれであった。

2年生からは木造新校舎でやさしい男性の先生になり、授業の合間には探検隊とターザンの冒険話を聞くのが面白くて学校に行くのが楽しくなった。3年生から6年生までの4年間はやはり男性の先生になり、今度はスパルタ教育となってしまった。日常的に頭部が拳で、尻は木の棒で殴られ更に、罰として廊下に立たされたことが幾度と重なり、その記憶は今でも鮮明に思い出される。しかし、その先生は屋外での遊びなのか、勉強に役立つのかの区別がつかないまま春には野原で日向ぼっこ、夏は山歩き、秋はキノコ採り、冬は陣取り雪合戦といろいろな事を授業にとりいれてくれて楽しいことが多かった。また、先生の指導により、野球と卓球を覚えるようになり屋外ではポロ布で作ったボールで野球をやり、屋内では卓球をして遊ぶようになった。授業を受ける態度もかわり、学力成績も3年生よりも4年生と上級になるにつれて良くなり、私としては感謝し尊敬している。当時の私たちの小学校の学級編成は2学年(3年生と4年生)1教室で授業をする複式授業であるので1年生から6年生まで3教室で全児童数が110名前後、先生3名と校長先生がいる規模の学校である。休日は山歩き、山登りが大好きでいつも友達5、6人で当時海拔標高720mほどの山頂に建設する米軍(現自衛隊)レーダー基地に伴う道路建設と兵舎建設工事の作業するブルドーザ、ダンプ等の重機類が高音で動くのが珍しく、また現場作業員が休憩時間や作業終了時などには運転席に勝手に乗ったりして怒られたり、追われたりしたのが何度も繰り返した思い出がある。

中学校は鹿山小学校と一緒に4kmほどの距離がある北浦中学校に入学する。運動部は野球部に入るが先輩の打撃練習の外野ボール拾いが多くて、面白くなく1年生の夏休み後に自然退部になるが、2年生の夏休みころになって秋の男鹿市内対抗試合に出るための部員不足のため再入部をすることになり、対抗試合でのポジションは一塁手で三番打者で初めて、二塁打二得点を挙げたのが記憶に残っている。

高校進学については数学担当先生(S8年建築科卒業)から建築科をでたら将来職人の大将になれると聞き、自分で建築科に決めたが、

「しかし、君は合格できるかはわからないよ」と言われたため、不安であったが、落ちて元々の気持ちで受験に臨み、僅かな希望をもって合格発表日の朝、布団の中でラジオ放送を聞き名前を聞いたときは少年時代の出来事で一番の感動と嬉しさであった。秋田県の中でも田舎者のためか高校に入って毎日昼休み時間に先輩から気合を入れられて応援歌の練習をさせられるとは、思いもしなかった。

運動部の各部活に入部を先輩に脅かされながら誘われたが全部断った。しかし、学級対抗試合のボクシングとラグビーの選手に推薦されて、ボクシングはクラスにいるボクシング部員に3週間ほどの指導を受けたので、3分間3回戦でノックアウト勝ちとラグビー対戦で勝ったのが思い出に残っている。また、日曜日の昼間は映画、夕方は喫茶店でテレビのプロレスラー試合を見る事が楽しく、高校3年間は平凡な生活であった。

就職は建設業に入ったが自分の想像した思いと現実の落差があまりにも大きいのに驚いてしまった。2週間ほどの研修を受けて、最初の配属建築現場作業所は川崎工業地帯の電機工場の建屋基礎工事中で、私の職務は各職人の手元(手伝い)と夕方にはコンクリート型枠修理工の型枠修理の数量検収及び職人出面人数と工事内容を記載する担当であったが現場専門用語の知識がなく、現場作業日報に作業内容を記載するのに苦勞をした。昭和30年代は川崎工業地帯の工場から出る排煙により、天気の良い昼間でも太陽光が見えなく、鼻孔はガスの吸い込みで真っ黒になり、炊事まかないのおばさんが、洗濯物をその日の風向きによっては場所を変えて干したりしていた。空気環境が田舎よりもはるかに悪いことに驚いてしまった。身体の調子具合も悪くなり、会社を退職して秋田に戻ることも考えたが、親の期待と親戚に対する恥さらしになるとの思いで、我慢したのが今の生活につながっている思いがする。

昭和30年代後半に入ると、東京オリンピック開催も近づき東京都心でもディーゼルハンマー(建設基礎くい打ち重機)の高音が鳴り響き、今では考えられない町中の工事騒音状況であった。私たち現場係員はオーバブリッチ(歩道上に造る仮設事務所)に寝泊まりして月2回の定休日があったが外の休日は簡単に取れないほど忙しかった。夜の遊び場には協力業者に連れていかれて、社会勉強も多くを学んだ。オリンピック開催関連施設工事にも携わり私の職業が世界の人々に利用される事を誇りに思っている。

私が全責任者になった現場で忘れる事が出来ない地震がある。今から33年前の宮城県沖地震で岩手県盛岡市内でのホテル建築現場で午後5時10分頃協力業者と総合打ち合わせ中にM7.4、震度5弱地震が発生し、事務所から全員飛び出て国道4号線に避難する。建築中の建物を見ていると、豆腐がユラユラ揺れるようでまた、外部足場は建物と別にガラガラ揺れる動きをする。建物が一瞬倒壊すると思った。8階部分が建て込み中で7階部分は3日前にコンクリートを打設したばかりのため、各部分が損傷して工事が中断になると思った。

会社及び設計構造事務所にも電話連絡がとれずにいると、次の日の午前1時半頃東京の設計構造事務所から連絡が入り、建物は地震時の状況のままにしておくように指示をもらった。心配なのは、工事損害保険で火災保険には入っているが地震保険には入っていないことであった。しかし、建物は調査の結果は大きな損傷も無く安心をすることができた。先日の東日本大震災は想像を絶する災害であり、私の経験した地震災害は小さく見えるようになった。